

1960年代カンボジアの政治体制と社会変化

——シハヌーク時代の実態について——

高橋宏明*

はじめに

2012年10月15日、北京でカンボジアのノロドム・シハヌーク（Norodom Sihanouk）前国王が逝去した。享年89歳¹⁾。激動のカンボジア現代史を体現した前国王の死は、カンボジアの一つの時代の終わりを象徴していたように見える〔The Cambodian Daily 2012〕。それは、20世紀後半における混乱と悲劇の時代との完全な決別である。

カンボジアで60歳以上の人と話をしていると、シハヌーク殿下（前国王）が統治していた、1960年代の思い出話がしばしば語られる。殿下は国家建設の先頭に立ち、政治・経済・教育等、あらゆる分野にわたってリーダーシップを発揮し、全ての人々から好かれていた、と懐かしそうに当時を振り返る。特に、地方に住む農民にこうした傾向は強い。

1970年以降、ベトナム戦争の拡大と内戦（1970～1975）、ボル・ボト時代の大虐殺（1975～1979年）、ベトナム軍の侵攻・内戦（1979～1991年）と続き、カンボジア社会は混乱を極めた。それだけに、こうした激動期を生き抜いてきた年配の人々にとっては、1960年代のシハヌーク時代こそが、平和の象徴なのである。

では、シハヌークの統治した1950年代前半から1960年代後半とは、具体的にどのような時代だったのだろうか。

本論では、1953年11月の独立から、シハヌーク追放クーデターの起きた1970年3月までの時期を対象とし、特に1960年代の統治体制の特徴と内政の推移を考察する。その上で、内政上の問題点を簡単に指摘したい。

1. クメール・ナショナリズム

1950年代前半から1960年代前半のカンボジアは、シハヌークの時代といっても過言ではなかった。政治、経済、教育、文化など、あらゆる分野において、シハヌークはリーダーシップを

受理日2016年11月23日

*教養学部国際学科教授

発揮しようとした。シハヌークは、寝る間も惜しんで、政府内部の全ての決済文書に目を通し、どんなに些細な事柄でも自ら決定を下した〔Chandler 1998：195-197〕。こうした手法は、後にシハヌーク独裁という弊害を生み出していく。

フランスからの独立後、新生国家の建設を推進するに際して、シハヌークは、古代アンコール王朝のジャヤヴァルマン7世（Jayavarman VII）の時代を理想とした。13世紀にアンコール王朝が全盛期を迎え、東南アジア大陸部全域に勢力を広げた時期を、カンボジアの「大アンコール王国」時代と呼んだ〔Ministère de l'Information 1962：17-19〕。このジャヤヴァルマン7世の統治時代にカンボジア王国の理想と規範を求めたのである。

さらに、自らアンコール王朝の末裔という血筋を強調し、古代アンコール文明の現代への復活を試み、国家建設の正統性に結び付けようとした。すなわち、シハヌークによる「クメール・ナショナリズム」とは、アンコール王朝全盛時代を理想化することで、カンボジアの国民統合を実現させようとしたことであった。

内政における、「仏教社会主義（Buddhist socialism）」の標榜も、ジャヤヴァルマン7世統治時代の社会の理想化であった。大乘仏教を信奉したジャヤヴァルマン7世の慈悲深さには、社会主義的要素が内包しているとした。その結果、王制と仏教と社会主義は矛盾することなく融合し、「仏教社会主義」は「王制社会主義」として、国家の基本的政策に結び付けられたのである〔高橋保 1972：34-35〕。

2. サンクム体制と親族支配

1955年3月2日、シハヌークは王位を父スラマリット（Norodom Suramarit）殿下に譲って国王を退位すると、4月には「人民社会主義共同体：Sangkum Reastr Niyum（略称サンクム）」を結成して自ら総裁に就任し、国家建設活動に直接従事することを宣言した。1960年4月3日にスラマリット国王が逝去した後は、国王を空位とし、憲法を一部改正して自分は国家元首に就任した。同時に、国家元首に権力を一元化した。サンクム体制を不動の仕組みにしたのである〔Ministère de l'Information 1962：62-66〕。

サンクム政権下でシハヌークは、国民の組織化を進めるために、1957年9月に「クメール王国社会主義青年同盟」（略称ユヴァション）、王国協同組合等を設立した〔Ministère de l'Information 1962：67〕。中央・地方支部を通じて、王制社会主義の理念の実現を目指したといえる。

サンクムは結成当時、シハヌーク総裁によって“政党”ではないと説明された〔オズボーン 1996：102〕。政治活動を推進する組織ではなく、一種の国民運動がその本質であるとされていた。とはいえ、サンクムは、シハヌークの関与するあらゆる政治的機会に利用され、中央地方に関わらず、大衆を動員する組織として機能した〔オズボーン 1996：101-103〕。

たとえば、「王国社会主義クメール青年同盟」は、8歳以上15歳以下の男女に対して、社会主義国家建設のための理念を浸透させ、実践活動に動員させる団体と規定されていたが、しかし実際には、「ユヴァション」の構成員は、選挙運動などの政治活動に動員される機会も多か

った。時には、サンクムの候補者に敵対する政治団体に対して、選挙運動の妨害を治安警察と共にやることさえあった。シハヌークに忠誠を誓う、若い親衛隊としての性格を帯びていたのである。こうした政治活動を通じて、彼らは、サンクムへの共属意識を培っていき、サンクム加盟者は、「サハチーヴン（同志）」と呼ばれるようになった [Ministère de l'Information 1962 : 67]。

また、サンクム体制化では、中央省庁や地方自治体の建物には、シハヌークの肖像画が何枚も飾られた。首都プノンペンや地方都市の目抜き通りでは、シハヌークによる国家建設の実績を称える巨大な写真パネルが設置された。パネルには「殿下万歳!」、「殿下とともに国家建設を邁進しよう!」といったスローガンが盛り込まれていた。こうした装置には、シハヌークをシンボルとして可視化させ、人々の意識に浸透させようとした意図が伺える。もちろん、肖像画のまなざしは人々に向けられていたが、その一方で人々を監視する役割も果たしていた。国民をサンクムのもとに一元化する政治的作用を持ち合わせていた。

サンクム体制とは明らかに、シハヌークの下に全てのカンボジア国民を動員するシステムの実現に他ならなかった。換言すれば、シハヌークの“カリスマ性”による支配の徹底が、サンクム体制の本質であった [Chandler 1998 : 199-200]。サンクムが、実質的な政党組織として存在し、シハヌーク独裁の推進装置として機能したことは間違いなかった。

シハヌークは、カンボジアという新生国家をしばしば家族にたとえた。シハヌークは国民を、「我が子どもたち（コーン・チャウ）」と呼んだ。国民は、国家元首としてのシハヌークを「父なる国王（サムダッチ・アウ）」と称えた [オズボーン 1996 : 147-148]。しかし、実際の「父」は常に支配者であり、「子ども」は「父」に従わなければならなかった。「子ども」が「父」に逆らうことは許されなかった。「父なる国王」と「我が子どもたち」という相互の呼びかけによって、支配者と被支配者の間には曖昧な作用が働いたように見える。実はこうした関係は、フランス植民地期における宗主国フランス（保護者）と保護国カンボジア（被保護者）の関係を踏襲したものであった。ある意味で、シハヌークは、独立運動の過程を通じて、フランスの統治方法を学び、新生国家建設の際にそれを踏襲したのである。

結局、シハヌークの実現した政治社会体制とは、元国王である自分自身に政治権力を集中させ、国民（「臣民」）を大衆動員するシステムの構築に他ならなかった。サンクム体制の完成は、「臣民」統治の徹底を意味した。それは一種の絶対王制の変形だったのである。

他方、政府の主要機関の人事に目を向けてみると、目ぼしいポストにはシハヌークの一族が登用されていた。特に警察機構や税関関連の人事が独占されていた。たとえば、治安・警察組織にはモニク夫人の兄弟が要職に就いた。モニクの兄ウム・マノリン（Oum Manorine）は地上防衛関連、弟ソステヌス・フェルナンデス（Sosthene Fernandes）は公安関連の国務大臣を歴任した [Jennar 1995 : 162-163]。後に、両兄弟は、不正貿易によって巨額の利益を得たとして逮捕された [Corfield 1994 : 75-76]。

治安組織、秘密警察への親族の配置は、権力基盤の安定を念頭においてのことであろう。また、自分の身辺警護に気を使ったからかもしれない。しかし、親族による政府主要人事の独占は、容易に汚職と結びついた。また、1960年代の政府には、シハヌーク一族ばかりではなく、

高級官僚一族による官職の独占が顕著であった。シハヌークは、こうした腐敗と不正を積極的に排除することができなかった〔オズボーン 1996：176-177〕。その結果、1960年代後半には都市部のインテリ層や若い官僚の反発を招くことになるのである。

3. 複数政党制の終焉と内政の混迷

「平和の時代」の内実は、どのようなものだったのだろうか。内政に焦点を絞ってみてみると、いくつかの特色が見えてくる。ここでは二点ほど指摘しておきたい。

第一は、複数政党制の否定である。1955年9月、第3回総選挙の勝利後、シハヌークは、全ての政党を巻き込んだ大衆翼賛会的な組織である「人民社会主義共同体」、すなわちサンクムを結成した。反対に、1957年8月、シハヌークは、「民主党：Krom Pracheathipodei（クロム・プロチアティパタイ）」を自然解党に追い込み、民主党員をサンクムに取り込んだ。以後、唯一の反対勢力である「人民党：Krom Pracheachon（クロム・プロチアチョン）」の関係者も地下活動に入り、1975年まで表舞台に出ることはなかった〔Chandler 1998：191-192〕。

シハヌークは、敵対する政治勢力や異なった政治思想を唱えるグループを、内部に取り込むか、あるいは排除し弾圧していった。こうして、1950年代後半には実質的に、複数政党制による政治が終わった〔Chandler 1998：184-188〕。民主主義的な政治体制は構築されず、国民の政治的自由は制限されるのであった。

第二の内政の特色は、政府の不安定さである。1950年代後半以降の内政を見た場合に気がつくのは、内閣改造の多さである。15年の間に、25回の内閣改造が実施された。短い内閣は1-2ヶ月で交代し、最長でも二年弱である（表1）。安定した長期政権が形成された時期は、実質的には1960年代初頭の数年間しかなかった。内政運営は最終的に、シハヌークの一声で内閣改造が繰り返された。しかも、首相の顔ぶれはほぼ決まっており、シハヌークが首班を務めないときは、王族や一部の側近が持ち回りで指名されていた。

内閣改造が頻繁に繰り返された主な理由は、内閣を構成する閣僚の政治思想的な背景の幅広さに起因していた。民主党で活動していた政治家から、パリ大学で博士号を取得したフー・ユオン（Hou Yuon）、フー・ニム（Hu Nim）、キュー・サンポーン（Khieu Samphan）といった左派の穏健なグループまでを含んでいたからである。彼らがサンクムの傘下に入り、政府の要職についたのであった〔Jennar 1995：155-159〕。左右のイデオロギーの違いをもつ者同士が、サンクムに収斂されていったといえる。

ところが、サンクムに参加した政治家の思想的背景の多様さが、逆に政府内部における頻繁な意見対立という問題を引き起こしてしまった。政治方針や政権運営をめぐる、しばしば閣僚同士が対立し、政府は機能不全に陥ってしまったのである〔オズボーン 1996：102-103〕。

1960年代に入りベトナム戦争が激化すると、北ベトナムによるカンボジア国内の左翼グループへの支援や働きかけに対して、シハヌークは過剰に反応しだす。秘密警察を使って、左派グループを頻繁に弾圧するようになった〔チャンドラー 1994：104-106〕。秘密警察に連行されたまま、行方不明になった活動家も珍しくなかった。

表1 1955-1970年における歴代首班内閣と在職期間

内閣の首班	開始	終了	期間
シハヌーク殿下	1955.10.3	1956.1.5	3ヶ月
ウー・チャンスン	1956.1.5	1956.3.1	2ヶ月
シハヌーク殿下	1956.3.1	1956.4.3	1ヶ月
キム・チット	1956.4.3 1	1956.9.15	5ヶ月
シハヌーク殿下	1956.9.15	1956.10.25	1ヶ月
サン・ユン	1956.10.25	1957.1.3	2ヶ月
サン・ユン	1957.1.3	1957.4.9	3ヶ月
シハヌーク殿下	1957.4.9	1957.7.26	3ヶ月
シム・ヴァー	1957.7.26	1958.1.21	5ヶ月
ベン・ヌート	1958.1.21	1958.4.29	3ヶ月
シム・ヴァー	1958.4.29	1958.7.10	2ヶ月
シハヌーク殿下	1958.7.10	1959.2.17	7ヶ月
シハヌーク殿下	1959.2.17	1959.6.13	4ヶ月
シハヌーク殿下	1959.6.13	1960.4.19	10ヶ月
ポー・プルーン	1960.4.19	1961.1.28	9ヶ月
シハヌーク殿下	1961.1.28	1961.11.17	11ヶ月
シハヌーク殿下	1961.11.17	1962.8.6	9ヶ月
チャウセン・コクサル	1962.8.6 1	1962.10.6	2ヶ月
カントール殿下	1962.10.6	1964.12.25	2年2ヶ月
カントール殿下	1964.12.25	1965.5.7	4ヶ月
カントール殿下	1965.5.7	1966.10.25	1年5ヶ月
ロン・ノル	1966.10.25	1967.4.30	6ヶ月
シハヌーク殿下	1967.5.1 1	1968.1.31	9ヶ月
ベン・ヌート	1968.1.31	1969.8.13	6ヶ月
ロン・ノル	1969.8.14	1970.3.18	7ヶ月

注：期間の項目について、日数は切り捨て。

出所：[Jennar 1995：150-163]をもとに筆者作成。

共産主義活動家の弾圧は、社会の監視体制の徹底化を意味していた。1963年頃には、サロー・サル（後のポル・ポト）やイエン・サリーなどの左派教師の多くが地下活動に入った。1967年にキュー・サンボーンらの左派政治家たちがプノンペンから姿を消してジャングルでのゲリラ闘争に転じた [オズボーン 1996：174-175, 216-217]。クメール・ルージュの原形がここに成立するのである。

このように、シハヌーク時代の17年間は、ベトナム戦争の直接的被害こそ受けなかったものの、複数政党制は実質的に認められておらず、民主的政治が行われたとはいえなかった。同時

に、内政運営も決して円滑に成されていたわけではなかったのである。

4. 国民統合の挫折

1950年代後半から60年代にかけて、カンボジアではシハヌークによって、「国民統合」の推進と「国民国家」の建設が模索された時代だった。隣国ベトナムにおける戦乱とは距離をおきつつ、平和を維持しながら新生独立国家を運営し、政策を遂行することが、カンボジアの政治指導者には求められた。国家元首としてのシハヌークは、いわば「上からの国民国家」建設を進めていたのである。しかし、1960年代半ば以降、シハヌークによる国民統合は挫折し、国民国家の建設は未完のまま終わってしまった。

では、それはなぜか。第一に、直接的な理由は、シハヌークの追放クーデターである。シハヌーク失脚の原因は、もちろん一つだけではなく、縁故主義的な政治に対する不満、経済的失政、財政危機の招来、雇用不足、ベトナム戦争拡大への社会不安など、いくつもの要因が、複合的に絡み合っていた。しかし、クーデターの結果、元国王という正統性をもつ指導者による「上からの国民国家」建設の契機が失われてしまったことは間違いなかった。

第二には、社会的な要因として、都市部における新興エリート層の台頭と彼らの政治への影響力の拡大が関係している。独立後の教育制度の急速な整備は、大量のエリート予備軍を形成した。彼らは、シハヌークの唱えたカンボジアの自主独立路線を信奉し、国家への奉仕活動に参加して、カンボジア「国民」としての意識をもち始めていた。しかし、シハヌークは、新興エリートたちの要望を汲み取ることはできず、縁故主義的な政治世界から脱却することができなかった。

シハヌークの政治的支持基盤は、一部の政府官僚と大多数の農民層である。政府高官は、植民地時代以来の保守的な王党派が多くを占め、自らの既得権益を守るために王制を支持していた。地方の農民は、「神としての王」シハヌークを信仰していた〔オズボーン 1996：148〕。都市部で台頭しつつあった新興エリート層は、王制と共産主義の間で揺れ動いていた。シハヌークは、これら三つの社会階層を「統合」し、「国民」として意識させることに失敗した。

1960年半ばになると、徐々に都市部の人々の間に不満が広まってくる。特に、独立以後の教育政策によって高学歴を得た若いインテリ層の間にその傾向が著しく、彼らはシハヌーク批判の声を上げるようになった。高等教育を受けても、卒業後に彼らを吸収する雇用の場がなかったからである。政府には、官僚が溢れていたのも、大卒者であっても特別なコネがなければ、役人になる道も閉ざされてしまっていた。

このように、教育制度の拡充と高等教育機関の急速な整備が逆に、雇用問題の深刻化を生み出すという結果を招いていた。また、隣国ベトナムの戦争も若者たちの不安を助長させる要因となった。独立後の教育機会の拡大によって恩恵を得ることができるようになった新興の社会階層が、皮肉にも、シハヌーク時代後半に不安定な社会状況を増幅させていくのである。シハヌーク失脚の最大の要因は、都市部の若い官僚エリート層や学生の間に蔓延していた、シハヌーク政治に対する不満にあったと思われる。

おわりに

1965年5月、シハヌークは米国と国交を断絶した。米国によるタイと南ベトナム支援が、カンボジア国内を不安定にし、反シハヌーク勢力を伸張させているとしたからである。この国交断絶は、軍人の給与遅配や待遇低下を招くことになってしまった。兵隊の給与は、米国からの経済援助によってまかなわれていたのである。カンボジア国軍の装備は貧弱になり、地方に駐屯する軍部隊はますます困窮していった〔オズボーン 1996：188〕。

こうした中で、地方の軍人は、ヤミ米の取り引きに従事するようになる。当時、政府は米を農民から政府価格で買い上げ、米取り引きを統制していた。しかし、ベトコン（南ベトナム民族解放戦線）による買い上げ価格の方が高く、農民は政府に米を出し渋っていた。そこに目をつけた軍は、農民から米を集め、不正にベトコンに供給して利益を得ていたのである。農民と軍を仲介したのは、華僑系の商人で、彼らはプノンペンで力をつけつつあった新興ビジネス・エリート層であり、徐々に政治的発言権を強めていた〔Chandler 1998：201-203〕。

このような軍による「闇ビジネス」は、1960年代初頭には黙認されていた。ところが、1966年頃から政府が米の取り引きを厳しくし、ベトコンに流れるヤミ米をシャットアウトしようとした。こうした施策によって不満を募らせたのは、地方の農民よりもむしろ、軍人や都市部の華僑系ビジネスマンたちであった。彼らはシハヌークの経済政策そのものに批判の目を向けるようになる〔Chandler 1998：201-204〕。

1960年代後半、中国にならった自力更生による経済政策は失敗した。財政が困窮すると、サンクム内における左右の政治勢力の均衡も崩れてしまった。このころからシハヌークは、政治の混乱を避けるようにして、趣味である映画製作に没頭していく〔オズボーン 1996：201-202〕。自らを主人公にした恋愛映画『ボコールのバラ』（1969年）など、10以上の作品を作り、1969年にはプノンペンで映画祭を主催した。映画作りが趣味の域を越えたとき、都市部のエリートたちの怒りは臨界点に達していた。彼らの政治不信と不満が頂点に達し、軍人が政府から離反したとき、シハヌークによる統治は終焉を迎えるのであった。シハヌークは、都市部で秘密活動に従事する共産主義者たちは警戒してはいたものの、新興社会階層の政治への影響力は軽視していた。

1970年3月18日、アメリカ寄りの右派ロン・ノル將軍によって、外遊中のシアヌークは国家元首を解任される。右派の政権奪取はベトナム戦争のカンボジア領内への拡大をまねく結果となり、カンボジアは戦乱に巻き込まれていった。こうして、20年以上にわたる内戦と混乱の時代が始まるのである。

1960年代のカンボジアが置かれていた国際政治環境を振り返った時、シハヌークの取り得る政治的な選択肢は限られていた。東西両陣営の谷間にあって、平和を維持しながら、国民統合を進め、国家を発展させるのは、困難であったろう。

本稿では、1960年代の内政を中心にふりかえり、シハヌーク政治の実態の一端について概述した。国際関係および外交政策は、別稿でまとめたいと考えている。

参考文献

- ・ オズボーン, ミルトン (1996) 『シハヌーク—悲劇のカンボジア現代史』 岩波書店。
- ・ チャンドラー, P・デービット (1994) 『ポル・ポト伝』 めこん。
- ・ 高橋保 (1972) 『カンボジア現代政治の分析』 財団法人日本国際問題研究所。
- ・ ノロドム・シハヌーク, ラクチュール, ジャン (1971) 『北京からみたカンボジア—シハヌークの祖国カンボジア解放闘争記—』 サイマル出版会。

- ・ Chandler, David P. (1992). *Brother Number One: A Political Biography of Pol Pot*. Boulder, CO: Westview Press.
- ・ — (1992). *The Tragedy of Cambodian History*. New Haven, CT: Yale University Press.
- ・ — (1998). *A History of Cambodia*. Chiang Mai, Silkworm Books.
- ・ Corfield, Justin (1994). *KHMERS STAND UP!, A History of the Cambodian Government 1970-1975*. Monash University, Clayton Victoria, Australia.
- ・ Delvert, Jean. (1993). *Le Cambodge*. Presses Universitaires de France.
- ・ Edwards, Penny (2007). *Cambodge: The Cultivation of a Nation, 1860-1945*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- ・ Harris, Ian (2005). *Cambodian Buddhism: History and Practice*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- ・ Jennaar, M.Raoul (1995). *Les clés du CAMBODGE*, Maisonneuve & Larose.
- ・ Kiernan, Ben (1985). *How Pol Pot came to power: A history of communism in Kampuchea, 1930-1975*. London: Verso.
- ・ — (1996). *The Pol Pot regime: Race, power, and genocide in Cambodia under the Khmer Rouge, 1975-1979*. New Haven, CT: Yale University Press.
- ・ Kiernan, Ben, & Boua, Chantou (eds.). (1982). *Peasants and Politics in Kampuchea, 1942-1981*. London: Zed Books.
- ・ Marston, John and E. Guthrie (eds.). (2004). *History, Buddhism, and New Religious Movements in Cambodia*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- ・ Ministère de l'Information (1962). *CAMBODGE*, Phnom Penh.
- ・ The Cambodian Daily, 16 Oct. ~ 15 Nov. 2012.

注

- 1) シハヌークは、1922年10月31日、スラマリット殿下とコサマクの長男として生まれた。父スラマリット殿下(1896-1960)はノロドム王の子息であるスタロット王子の息子、母コサマク(1904-1975)はシソワット王の息女であった。二人の結婚は、両家の王位を巡る確執を解消する意味があったとされている[シハヌーク 1971: 8-10]。1941年4月22日にモニヴォン王が死去すると、シハヌークはベトナムでの学業を途中で終え帰国した。国王候補の一人に推薦されたのである。